

悪性リンパ腫脳転移の患者に複数チームが関わり院内での ADL を改善した 1 例

鈴鹿中央総合病院

NST¹⁾、薬剤部²⁾、栄養科³⁾、看護部⁴⁾、緩和ケア内科⁵⁾

田中里奈^{1) 2)}、藤田征志^{1) 2)}、黒川公恵^{1) 2)}、溝口紗和子^{1) 2)}

仕田原由里^{1) 3)}、松本美保^{1) 3)}、堀木昆財^{1) 4)}、林優里^{1) 4)}、寺邊政宏^{1) 5)}

【症例】

58 歳、女性。悪性リンパ腫の頭蓋内再発で入院した。

入院時には嚥下障害があり、入院後は順調に軽快していたが、入院 2 ヶ月後にカテーテル関連血流感染を併発し、嚥下機能・身体機能の低下をきたした。

緩和ケアチームによって、この患者にとっての入院中の一番の楽しみは『食べること』であり、徐々に食べられるようになることで、達成感を得ることができていると評価された。

この評価をもとに、嚥下チームでは摂食嚥下訓練だけでなく、栄養士と連携し、患者本人が希望する食事の摂食の可否や形状の工夫を検討した。リハビリテーション科では献立掲示板や売店へ行き、食べ物を買うという目標を持たせた歩行訓練や『食べること』に対する本人の語らいに傾聴することを心がけた。NST では他チームの情報を元に補食や補完的中心静脈栄養の変更をこまめに行い、栄養状態の維持に努めることで ADL の改善をもたらした。

【まとめ】

この症例を通じて、NST がまとめ役となり、複数チームの連携を図っていくことができると考えられた。